

## はじめに

千葉大学大学院人文社会科学部教授 小林正弥

本報告書は二つの内容から構成されている。一つは日本における優れたドイツ観念論の受容者である南原繁のドイツ観念論受容、特にそのフィヒテ研究を取り扱った論文であり、もう一つは日本に対する比較文明論的考察を行った S.N.アイゼンシュタットの議論の紹介である。前者が本報告書の第一部を構成し、後者が第二部を構成している。

第一部について言えば、一般的にドイツ観念論(*deutsche Idealismus*)は日本において理想主義と戦前は訳され、大正期から昭和初期に活躍した日本の知識人に一定の影響を与えたとされている。それでは、その影響とは具体的にどのようなものであり、そして近代日本の知識人たちがドイツ観念論の影響を受け、それを受容した意義とは何であったのか。この問いを考えることは、同時に近代日本の知識人、特に現在の私たちの価値観の形成に寄与した大正期、昭和初期の日本の思想家たちの知的営みを再確認することでもある。

本報告書においては、日本における積極的なドイツ観念論受容者として南原繁を取り上げる。戦後東京大学総長を務め、活発な言論活動を行った戦後の代表的な知識人として、また優れた日本政治思想史の研究者である丸山真男や西欧政治思想史研究の権威福田歓一の師として知られている南原繁は、同時に日本における優れたドイツ理想主義政治思想、具体的にはカント、そして特にフィヒテの政治思想の研究者であった。しかし南原繁は単なる無批判な日本におけるカントやフィヒテの受容者ないし紹介者ではなく、そこには彼のキリスト教信仰と当時の時代文脈における南原のドイツ観念論との「対話」が存在していたのであり、その対話の再構成とその意義の考察が第一部の中心的内容である。

続く第二部においては、南原の弟子である丸山真男の日本政治思想史研究の影響を受けながら、日本に対する比較文明論的考察を行ったアイゼンシュタットの議論を取り上げている。南原繁はフィヒテの影響もあって先駆的・先進的なコミュニタリアニズム的思想を持っていたが、丸山もカントやマックス・ヴェーバー、そしてマルクスといったドイツ思想の影響を受けていた。アイゼンシュタットは非常に大きな影響をヴェーバーから受けており、ヴェーバーの「宗教と経済倫理」に見られるような視角を、マクロ社会学における比較文明論として展開した。それは、特に「宗教と政治倫理」とも言えるような面を持っている。アイゼンシュタットの日本文明論は、丸山らの洞察も比較文明論の枠組みの中で取り入れており、丸山の日本文化論、特に古層論とアイゼンシュタットの日本文明論とに共通性があるのは偶然ではない。

さらに、アイゼンシュタットの文明論の軸をなしているのは、戦後ドイツにおける実存主義的な理想主義的哲学者カール・ヤスパースの枢軸時代の概念である。マックス・ヴェーバーの弟であるアルフレート・ヴェーバーも文明論を提起していることも想起しておいてよいだろう。ドイツのエルフルト大学のマックス・ヴェーバー研究センターにおいて、枢軸時代についての国際会議が行われ、アイゼンシュタットその他、ハーバーマス、ロバート・ベラー、チャールズ・テイラーというような錚々たる学者たちが集まってその概念について真剣な討議を行った。ハーバーマスは今日のドイツにおける最大の哲学者だし、ベラーはパーソンズ社会学から出発しつつヴェーバーの影響を深く受け、アイゼンシュタットと同様に枢軸時代の観念を重視して、包括的な比較文明論的な比較宗教研究を展開するに至った。またテイラーは、ドイツ観念論を代表するヘーゲルの研究から出発して、コミ

ユニタリアニズムにおける最大の哲学者となった。いずれにおいてもドイツ思想の影響は極めて大きい。

このように考えてみると、「カント・フィヒテ→南原」と「ヘーゲル→テイラー」とはユニタリアニズム的な方向で類似した展開を示しているし、「ヴェーバー→丸山」と「ヴェーバー・ヤスパース→アイゼンシュタット」、そして「ヴェーバー・ヤスパース→ベラー」は、比較文明論において類似した側面を持っている。そこで、第一部と第二部の双方において、ドイツ観念論が与えた影響や今日における影響の深さを例証することができると思うのである。

なお、第一部は榎木憲一郎が慶應義塾大学大学院法学研究科に2008年に提出した修士論文に、その後の研究成果を踏まえて加筆修正を行ったものであり、第二部は千葉大学において、アイゼンシュタットの著作『日本：比較文明論的考察』について小林正弥が行った講義を録音からおこしたものである。